

7 やばた かなやま 矢畑 金山遺跡第24次調査

中川 泰

- 1 調査地点 矢畑字金山 90 番 4 ほか 7 筆
- 2 調査期間 令和 3 年 1 月 18 日～2 月 10 日
- 3 調査主体 株式会社斉藤建設
- 4 調査担当者 中川 泰
- 5 調査目的 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 6 調査面積 86.5㎡
- 7 遺跡の時期 奈良、平安、中世、近世以降
- 8 遺跡の位置と立地

茅ヶ崎市は相模川下流左岸に位置し、南は相模湾に面する。その地形は、北部の洪積台地と南部の沖積低地に分かれる。矢畑地域は相模川などに形成された自然堤防（沖積微高地）上にあり、西側を小出川、南東側を千ノ川に挟まれている。

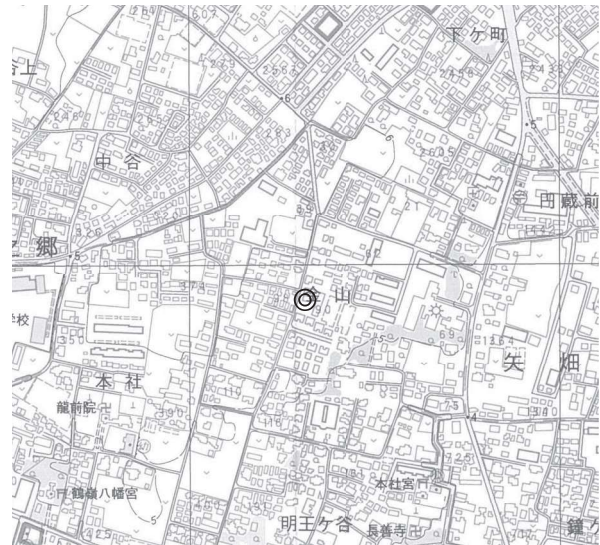
矢畑金山遺跡は神奈川県茅ヶ崎市遺跡包蔵台帳にNo. 182 として登録されている。相模湾海岸線から北に約 2.5km、JR 茅ヶ崎駅から北西 1.5km、JR 相模線北茅ヶ崎から西約 1.1kmに位置する。範囲は東西約 350 m、南北約 400 mで、時代は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世である。種別是集落址、館跡である。

本調査は宅地再開発の道路配管部の調査でおこなわれた。調査地点は、相模湾から北に約 2.7km、南北に流れる相模川から東に約 2.3km、小出川から東に約 6.5kmに位置する。遺跡範囲中央からやや南西に位置する。標高は約 5.0 mを測る。

9 調査の経緯と経過

茅ヶ崎市矢畑字金山 90 番 4 外 7 筆における土木工事等について、事業者から埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた茅ヶ崎市教育員会は、令和 2（2020）年 10 月 27 日に試掘・確認調査を実施した。その結果、奈良時代～近世前半の遺物、遺構が確認された。事業者と協議を行った結果、遺跡に影響を与える部分については事前発掘調査を実施することで調整を行った。調査面積は、事業面積 891.31㎡に対し 86.5㎡とした。

調査は令和 3（2021）年 1 月 18 年から開始



第1図 調査地点位置図（1/10,000）

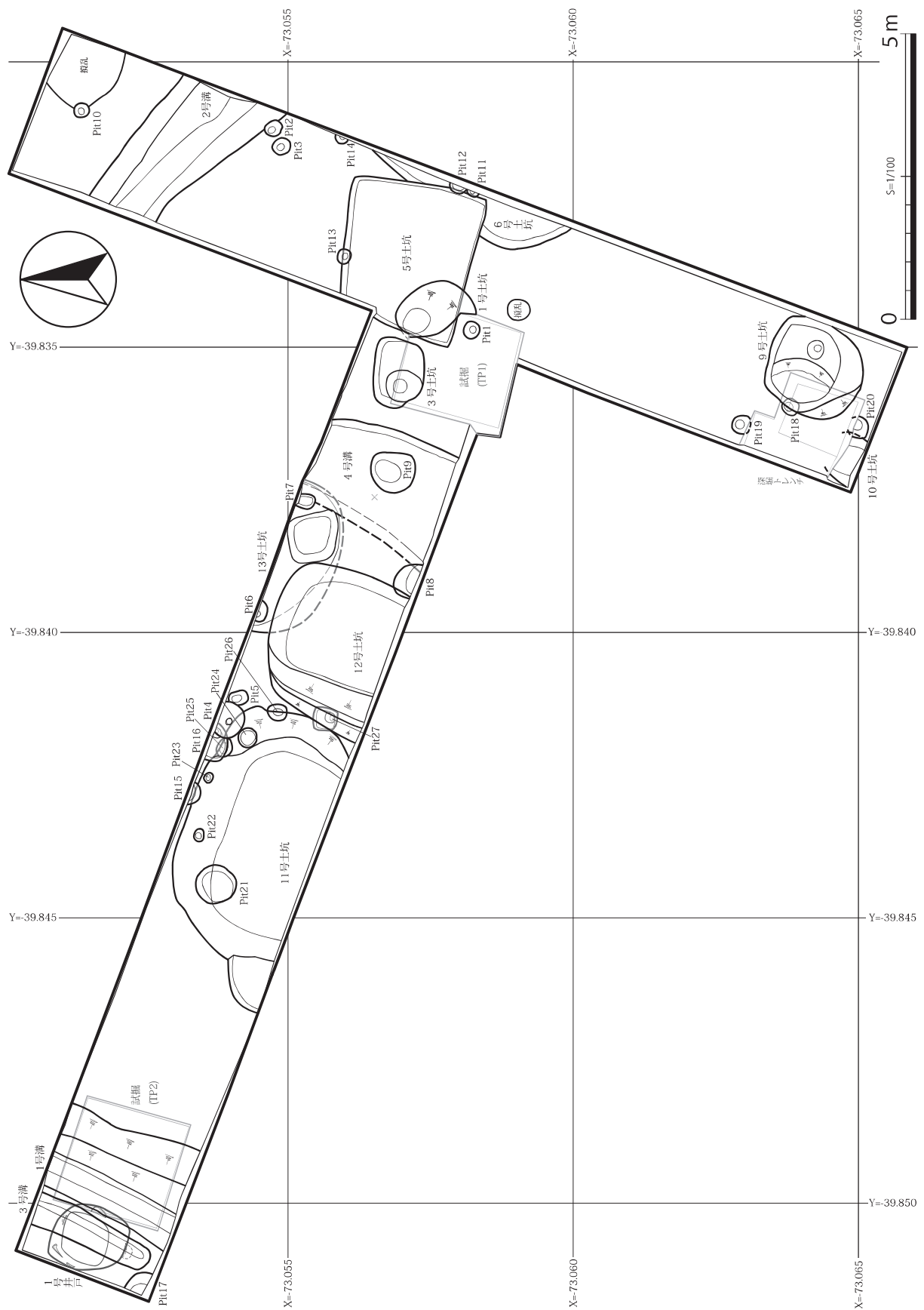
した。調査範囲は幅約 2.5 mで東西約 20.4 m、南北 15.8 mのT字状を呈する。調査は確認調査で得られた資料を基に、表土および必要部分（客土～基本土層Ⅱ層上面）までを機械掘削とし、Ⅱ層上面以下の遺構確認ならびに遺構掘削、包含層掘下げ作業は人力掘削を基本とした。廃土処理・安全性などを考慮し、T字状の調査区を南・北・西区に区分けし、西区、北区、南区の順で各層位ごとに掘削を進めた。測量は特にグリッドは設定せず、調査区内に基準となる任意の杭 3 点を設定し、国家座標値を利用して光波測量による平面図作成を行った。調査は 2 月 10 日に終了した。

10 調査の概要

今回の調査では、遺構は中世の溝状遺構 4 条、土坑 9 基、井戸址 1 基、ピット 27 基が検出された。その他、調査区南西側の壁断面で客土直下に近世以降の畝址と思われる層が確認できた。遺物は整理箱 1 箱分が出土した。

[溝状遺構]

1 号溝状遺構は西区西端に位置し、南北に走行する。区外に延びる大型の溝で一部は 3 号溝に切られる。確認幅は 2.74 mである。断面は上部が緩やかに立上り、下部が急に立上る段状を呈し、下部はU字形で底部は平坦である。深さは 0.94



第2図 遺構配置図 (1/100)

mである。形状から中世の大溝の類と思われる。覆土中からは常滑甕片、かわらけ、石製品などが出土している。2号溝状遺構は北区に位置し、東西に走行する。東側は大きな攪乱に削平されている。幅は1.26～1.7 mである。断面は北側が緩やかに立上り、南側がやや急に立上る。深さは0.5 mである。形状から中世の区画溝と思われる。覆土中からは常滑甕・鉢類片、かわらけ、須恵器、土師器などが出土している。3号溝状遺構は西区西端に位置し1号溝状遺構を切る。南北に走行し、南側は端部で、北側は調査区外に延びる。断面はV字形を呈する。覆土中からは常滑甕片などが出土している。4号溝状遺構は西区東側に位置し、南北に走行する。幅は1.43～2.17 mで、深さは0.5 mである。断面は急な立上りでU字形を呈し、底部は平坦である。

[土坑]

土坑は9基確認された。1・3号土坑は試掘時(TP1)で確認された土坑である。遺物は土器小片数点で、何れも器種、年代を特定できるものではなかった。5号土坑は北区南端に位置する。東西2.3～2.7 m、南北2.1～2.4 mの台形を呈する。断面は垂直に近い急な立上りで、底部は平坦である。遺物は青磁、古銭、土師器、須恵器などがある。6号土坑は北区南東端壁際に位置し、確認部分が矮小であるため平面形は不明瞭である。遺物は無い。9号土坑は南区南側に位置する。平面はやや歪な隅丸長方形で、断面は緩やかな立上りである。10号土坑は南区南西隅に位置する。南側は調査区外に延び、北側は土層確認トレンチで切られるため平面形は不明瞭だが、楕円形と推定される。播鉢が出土している。11号土坑は西区中央付近に位置する。南側は調査区外に延びる。大型の不整円形と推測される。残存長は東西5.3 m、南北2.28 mである。断面はやや急な立上りで、東側には段を有する。遺物はかわらけ、播鉢などが出土している。12号土坑は11号土坑東側に近接する。南側は調査区外に延びる。平面は隅丸長方形と推測される。残存長は東西2.5 m、南北2.13 mである。断面は下部が急で上部が緩やかな立上りである。陶器鉢・甕転用砥石、須恵器、土師器などが出土している。13号土坑は西区東

側に位置し、東側を4号溝状遺構、南西側を12号土坑に切られ、北側は調査区外に延びる。平面は円形と推測される。断面は急な立上りである。陶器甕・鉢類、かわらけ、土師器、須恵器などが出土している。

[井戸址]

1号井戸址は調査区西端に位置する。平面はやや歪な隅丸方形で長軸1.3 m、短軸1.17 mである。確認面から2.3 mで湧水が認められ、それ以下の掘削は断念したため、底部は未検出である。陶器小皿・片口鉢・甕、須恵器、石製品、獣骨などが出土している。

[ピット]

ピットは27基検出した。ピット4・8・16・21・27がやや大きく、径43.5～68 cm、その他は18～38.5 cmの小ピットである。平面はピット5・27が隅丸方形と推測されるが、他は円形である。

11 まとめ

発見された遺構は、何れも中世と推察される。重複も見られ、遺構の年代は3時期に分かれる可能性がある。各遺構覆土および堆積土層中には古代の土師器片、須恵器片が含まれていたが、遺物が確認されている遺構は何れも、覆土に中世以降と思われる陶器片、磁器片、かわらけ片を包含している点から中世遺構とした。また、無遺物の遺構もそれらの遺構と層位的に時期が平行すると推察し、中世遺構とした。1号井戸址は、1号溝状遺構に上部を完全に削平されている状態の確認であったため、古い遺構の可能性も考えられたが、中世と思われる陶器皿・片口鉢が出土したため、中世遺構とした。矢畑地区は中世において「懷島三郷」と呼ばれる中心地区であったと伝えられており、同地区の特徴の一つとして、大小の溝状遺構が数多く確認されていることがあげられる。本調査でも4条の溝状遺構が確認されている。中でも1号溝状遺構は平面規模の全容は不明だが、断面の形状などから土地の区画溝と推察される。2・4号溝状遺構も規模はやや小さいが区画溝と推察される。以上のことなどから、本調査では同地区の中世以降の土地区画など、集落の様相を確認するための資料を得ることができた。



写真1 調査区西区完掘状況[西から]



写真2 調査区西区完掘状況[東から]



写真3 調査区北・南区完掘状況[南から]



写真4 5号土坑全景[南から]



写真5 1・3号溝状遺構全景[南から]



写真6 11号土坑全景(遺物入り)[南から]



写真7 1号井戸址裁割状況[東から]

8 はまのごう みやのこし 浜之郷 宮ノ腰遺跡第 17 次調査

加藤 大二郎

- 1 調査地点 浜之郷字宮ノ腰 486-6
- 2 調査期間 令和2年6月8日～7月8日
- 3 調査主体 茅ヶ崎市教育委員会
- 4 調査担当者 加藤大二郎（社会教育課）
- 5 調査目的 個人住宅新築工事に伴う調査
- 6 調査面積 45m²
- 7 遺跡の時期 古墳、奈良、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

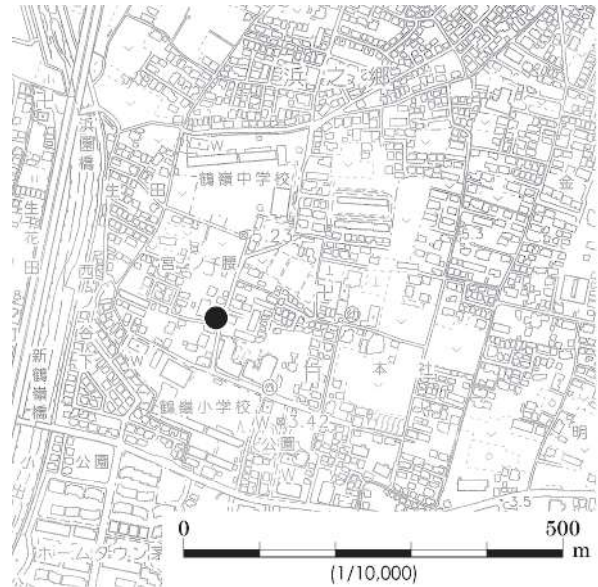
本遺跡は、市の中央西部に位置しており、相模川やその支流によって形成されたと考えられる沖積微高地上に立地している。遺跡のすぐ西には現在の小出川が流れており、東側に隣接している本社 A 遺跡には龍前院や鶴嶺八幡社が所在する。本遺跡や周辺の遺跡からは古墳時代以降の遺跡内容が多く発見されており、現代に至るまで人類活動が活発な地域であったことがうかがえる。

本遺跡北部には鶴嶺中学校、南部には鶴嶺小学校が所在しており、小中学校内外含め、過去に 16 次にわたって調査が実施されている。また、このほかに遺跡内の道路において、公共下水道布設工事に伴う発掘調査も実施されている。これらの調査では、古墳時代後期の工房址の可能性がある竪穴建物址が発見されているほか、平安時代に至るまでの竪穴建物址や中世の溝状遺構や井戸址、近世の溝状遺構等が発見されている。

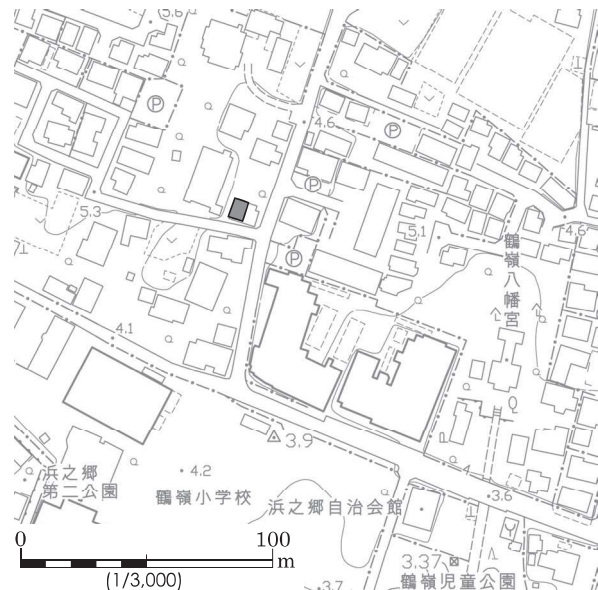
本調査地点西側では、平成 29 年に第 16 次調査を実施し、古墳時代後期から近世の遺構、宝永火山灰と当該地周辺の地山層を利用して版築された蔵址が発見され、近世後半以降、中世～近世前半、奈良・平安時代、古墳時代後期の各時期に属す遺跡内容が明らかになっている。

9 調査の経緯と経過

当該地について、事業者より個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて令和元年 5 月 27 日に照会を受け、周辺における過去の調査成果から、計画されている工事による掘削が埋蔵文化財に影響を与える可能性が高かったことから、文化財保護法第 93 条に基づく届出を提出す



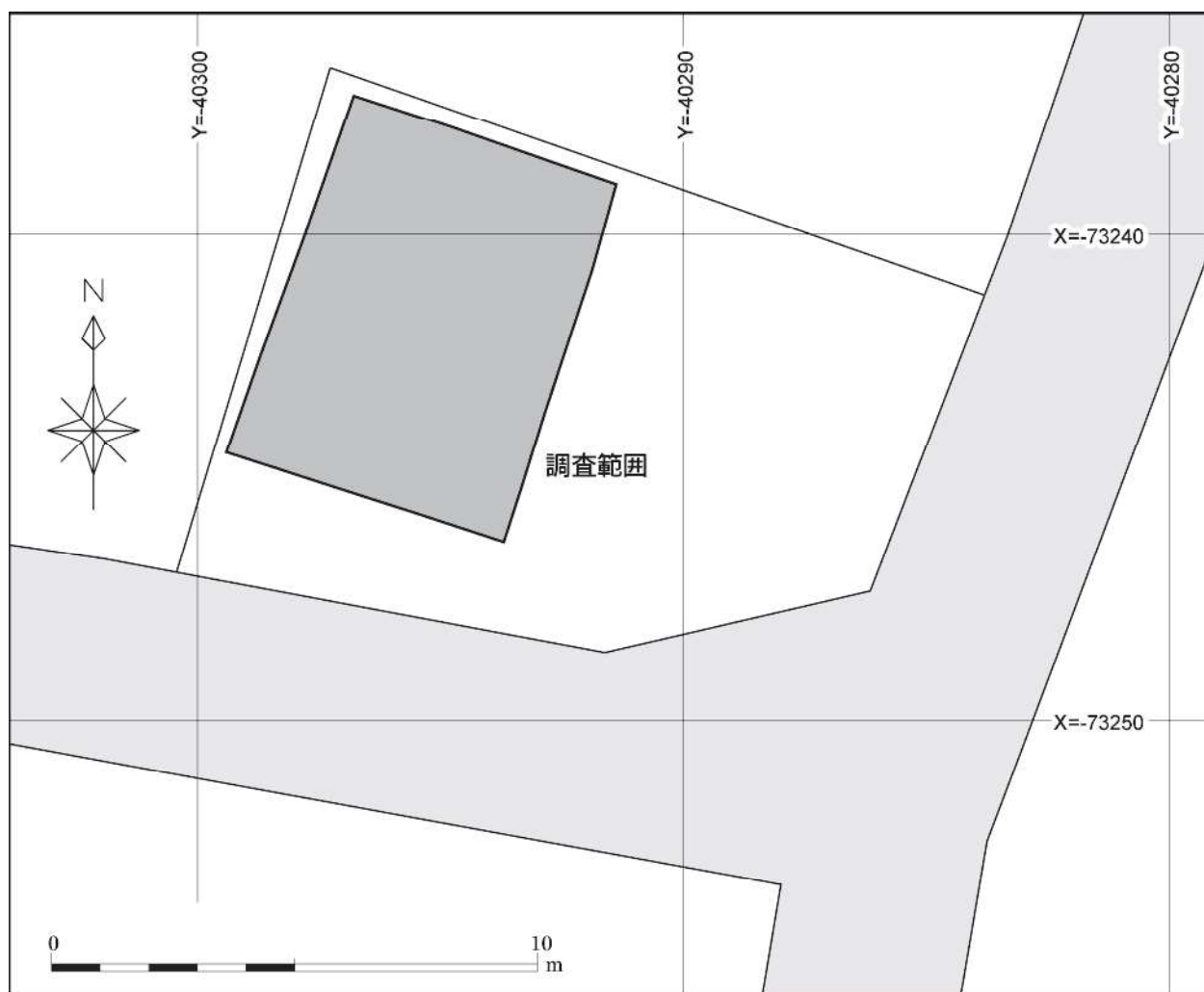
第 1 図 調査地点位置図 (1/10,000)



第 2 図 調査地点位置図 (1/3,000)

るよう指導し、影響を与える範囲について、記録保存を目的とした発掘調査を実施する必要がある旨を事業者に伝えた。その後、工事計画の変更が難しいことから、5 月 28 日に実施した協議の結果、発掘調査を実施することとなった。

調査区は、事業計画地西側に東西 6 m × 南北 7.5 m の調査区とし、トータルステーションを用いて世界測地系により設定した。調査対象地は、以



第3図 調査区配置図 (1/200)

前は宅地であったが、調査開始時は建物解体後の更地であった。地表から約25cmは解体に伴う表土であり、表土下から約20cmは宝永パミスを含んでおり、近世後半以降の耕作土が堆積していた。表土掘削によってこの土層までを取り去ったところ、調査区西部中央において当該地周辺の地山層と考えられる土層を部分的に確認した。このことから、近世以前の遺物包含層がほとんど存在しないと考え、遺物は遺構毎に取り上げることとし、グリッドの設定は行わなかった。

事前の測量を6月2日に開始し、6月8日から表土を掘削し、近世後半以降の遺構から古墳時代後期の遺構について順に掘削、記録作成を実施し、7月8日までにすべての記録作業が完了し、現地での調査を終了した。

なお、平面記録については、トータルステーションを用いて測量を行った。

10 調査の概要

遺構名について、本報告では現地調査中の呼称を優先した。そのため、新旧の順序は番号順ではない。また、土坑、竪穴状遺構、ピット等の名称も調査時の呼称となっている。

(1) 発見遺構

〈近世後半以降〉

第1、2号溝状遺構、第1～3号土坑

〈中世〉

第1号井戸址、第3、4号溝状遺構、第5、6、9号土坑、1～3号ピット

〈奈良・平安時代～古墳時代後期〉

第1号竪穴状遺構、第7、8、10～13号土坑、第4～10号ピット

〈奈良・平安時代〉

第1、2号竪穴建物址

〈古墳時代後期〉

第3、4、6号竪穴建物址

(2) 出土遺物

〈近世〉磁器

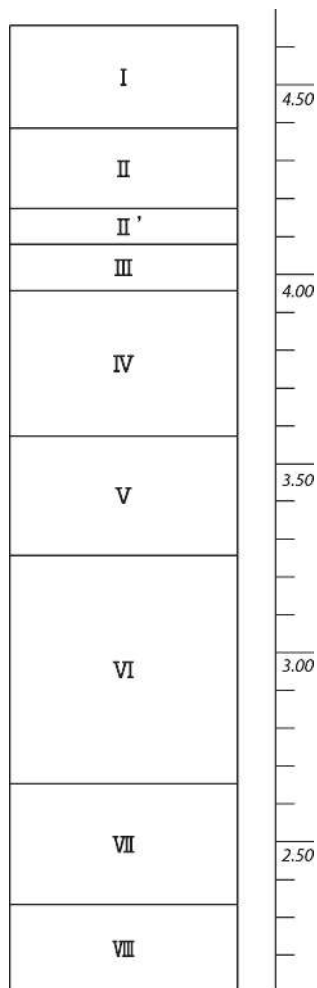
〈中世〉陶器

〈古墳時代～平安時代〉

土師器坏、甕、甗、
須恵器坏、甕、瓶、
管状土錐、砥石、板
碑片、鉄製品

(3) 基本層序

本調査地点の堆積土層は粘性の強いにぶい黄褐色土層（Ⅳ層以下）が地山層となっており、調査区西部においてわずかに古代の包含層であるⅢ層が存在した。Ⅲ層の上には宝永パミスを含む近世後半以降の耕作土（Ⅱ層）が堆積しており、最上部は建物解体時の攪乱を受けた表土が堆積していた。調査区内のほとんどが遺構覆土となっていた。また、Ⅳ層以下は調査区南西部の第1号井戸壁面を利用して確認した。



第4図 基本土層柱状図

第Ⅰ層 暗褐色土 (10YR3/4)：表土。灰白色パミス (3～5mm) を斑に少量含む。堆積粗く、部分的にしまりやや強い。粘性ややあり。

第Ⅱ層 暗褐色土 (10YR3/3)：近世層。第Ⅰ層に似るが、パミスやや増す。堆積状況は第Ⅰ層より密になる。炭化物ごく少量含む。

第Ⅱ'層 暗褐色土 (10YR3/3)：第Ⅱ層より粘性やや減る。若干カサつく。

第Ⅲ層 暗褐色土 (10YR3/3)：古代層。第Ⅱ層より黒い。橙色スコリアを全体に少量含む。粘性、しまりあり。暗褐色土 (10YR3/4) が斑にごく少量混じる。

第Ⅳ層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)：第Ⅲ～Ⅴ層の漸移層。土粒細かく、ややソフト。

第Ⅴ層 黄褐色土 (10YR3/6)：粘性、しまり強い。

第Ⅵ層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)：全体に酸化し、やや赤褐色を呈す。粘性強い。

第Ⅶ層 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)：全体に酸化する。土質ソフト。明赤褐色酸化土 (5YR5/6) をブロック状に含む。

第Ⅷ層 褐色砂質土 (10YR4/6)：土質ソフト。堆積密。全体にやや酸化している。

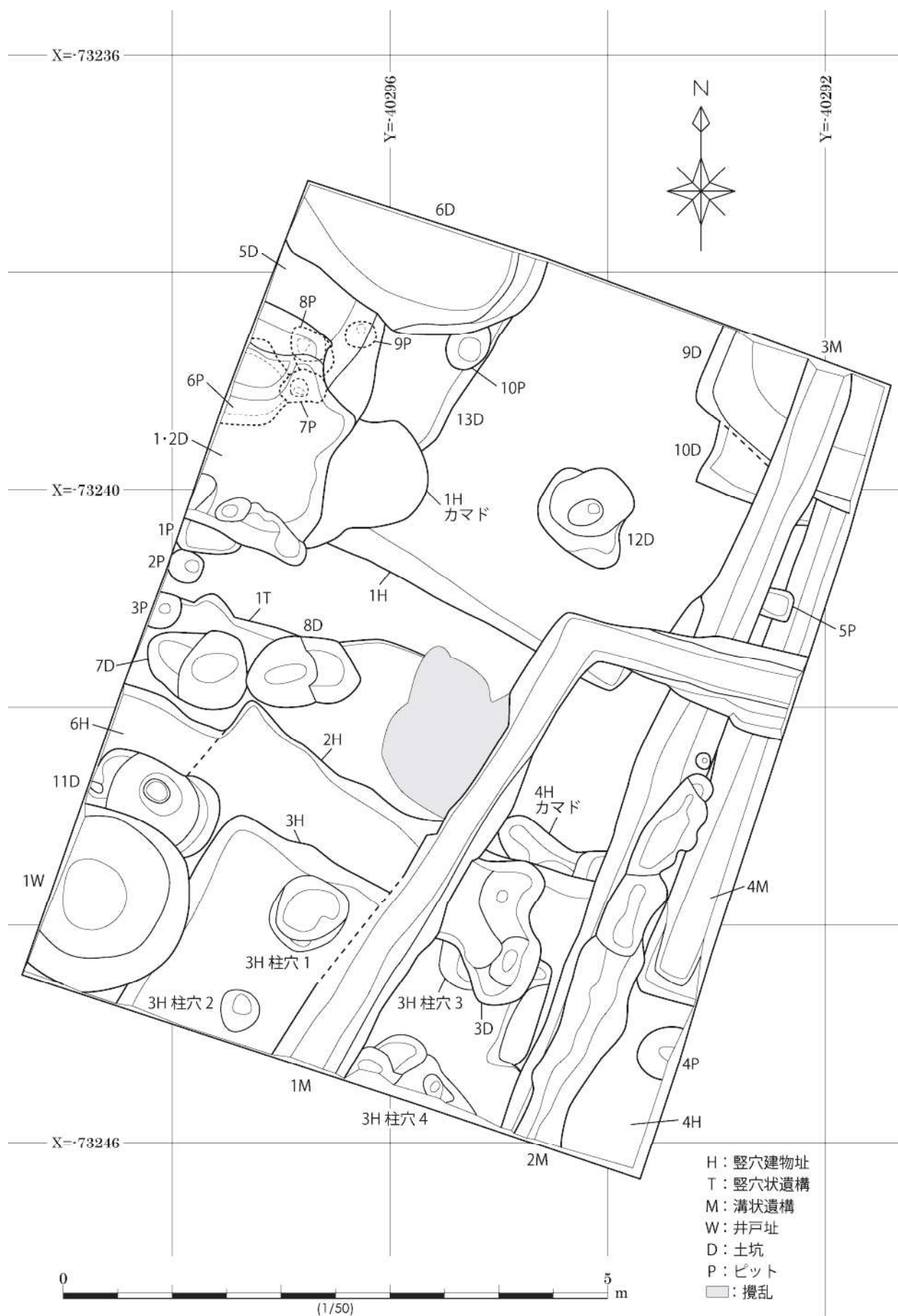
(4) 概要

近世後半以降の遺構としては、第1、2号溝状遺構、第1～3号土坑がある。第1号溝状遺構は調査区内で約115°屈曲しており、断面形状は角がやや直角なU字形で底面の高さは概ね均一であることから、堀の機能を有していた可能性がある。第2号溝状遺構は第3号溝状遺構の覆土であった可能性もあるが、若干軸がズレること、第3号溝状遺構の東肩より幅が広いことから、別遺構としている。正式報告までに検討が必要な遺構である。第1号土坑と第2号土坑は覆土内の宝永火山灰、軽石の密度の差から別遺構として掘削したが、完掘後に同一遺構であることが判明した。第3号土坑は宝永火山灰、軽石を覆土に含み、第1号溝状遺構より新しい。

1、2、3号ピットは平面形が方形に近い、中世の遺構の可能性があり、また、第1号井戸は出土遺物の大半が古代の遺物であるが、板碑の可能性のある石が出土しており、中世に埋没した可能性がある。このほかはすべて古代の遺構と考えられる。

古代の遺構は多くに重複関係が見られ、平安時代から古墳時代後期の遺構までが複数重複している。古代遺構については主要な遺構について概要を述べる。

調査区北西部及び北東部には方形の土坑が複数見られる。深さにはばらつきがあるが、1 m程の深さを持つものが多い、また、北西部の土坑の下部及び周囲から柱穴と思われるピットが複数確認されている（第6～10号ピット、第12号土坑）。竪穴建物址を5軒確認しており（第5号竪穴建



第5図 遺構配置図 (1/50)

物址は欠番)、調査区全体に存在している。特に調査区中央から南部に集中して重複している。第3号竪穴建物以外はやや浅く、床面はすでに削平を受けている可能性が高い。特筆すべき遺構として、第3号竪穴建物址がある。本址からは複数の類例の少ない土師器、須恵器の高台付坏が出土している。これらの土器は古墳時代後期の金属器を模倣したものの系譜と思われ、祭祀に関係があるものと思われる。

第4号溝状遺構は、仮に溝状遺構として整理しているが、幅約60cmで断面形は角が直角なU字状を呈しており、第1号溝状遺構と近似した形態をしているが、こちらは古代遺構であり、調査区南部で止まっている。こちらも類例の少ない遺構形状をしており、調査時の所見としては墓廬等に近似する形状として認識していたが、土層中から骨片等は確認されなかった。一般的に古代集落遺跡で見られる遺構の形状、規模ではなく、なんらかの祭祀に関連する遺構の可能性がある。調査区東側に近似した遺構が展開していれば、用途等の特定が進む可能性がある。

また、第11号土坑は柱穴と思われるが、同規模のものが調査区内に存在しないため、単独、あるいは調査区南西側に構造物が展開するものと思われる。

以上主要な遺構について、その概要を述べた。

11 まとめ

本遺跡は、過去の調査において、古代の鍛冶工房を想定する建物址が複数確認されており、市内でも古代～近現代における遺跡の密度が高い特徴がある。本地点では、古代、中世、近世の各時期において複数の遺構が重複していた。中近世には似た断面形状をする溝状遺構が存在しており、古代には竪穴建物址が複数重複している。中でも第3号竪穴建物址の遺物は金属器を模倣した形状をしており、市内でも類例の少ない遺物である。今回の調査は小規模だが特殊な遺構、遺物が見つかり、本遺跡の古代の様相を解明する手がかりになるとと思われる。



調査地近景（南東から）



完掘状況（南西から）



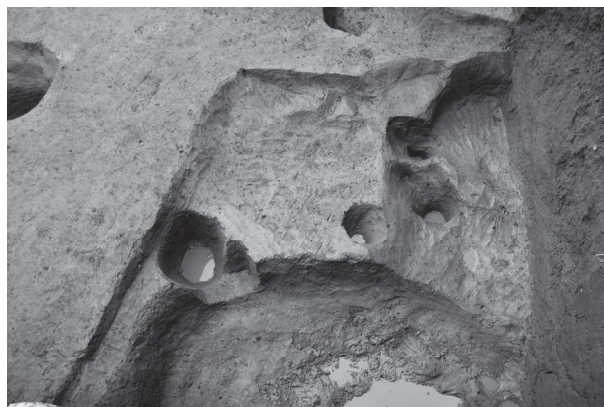
第3・4号溝状遺構（北東から）



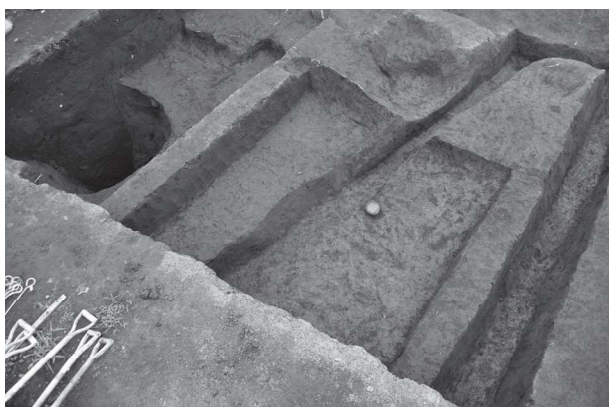
第1・2号溝状遺構（南西から）



第1号井戸址（南東から）



第5・6・13号土坑周辺（北東から）



第2号竪穴建物址遺物出土状況（東から）



第3号竪穴建物址（北西から）



第3号竪穴建物址遺物出土状況（北から）



第4号竪穴建物址（南東から）



第3号竪穴建物址出土遺物



出土遺物

9 かがわ はら 香川 原遺跡第1次調査

関根 信夫

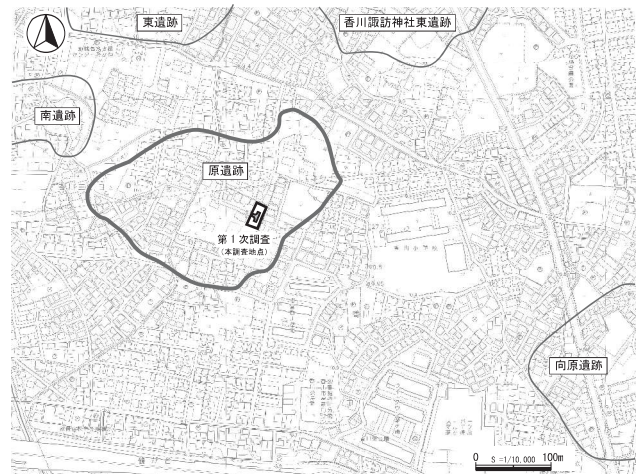
- 1 調査地点 香川一丁目 201 番 1 外 2 筆
- 2 調査期間 令和2年5月11日～6月1日
- 3 調査主体 株式会社四門 文化財事業部
- 4 調査担当者 関根 信夫
- 5 調査目的 宅地造成工事に伴う記録保存
- 6 調査面積 約 101.77m²
- 7 遺跡の時期 古墳、奈良、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

香川原遺跡（茅ヶ崎市No. 53 遺跡）は、茅ヶ崎市の北西側、JR 東海道本線茅ヶ崎駅の北約 2.5km、相模川から東へ約 3.0km の香川地区に位置する。地形的には、「湘南砂丘」と呼称される東側の藤沢市域から西側の相模川河口付近まで現海岸線とほぼ並行して延び、数条に渡り存在する砂丘の第3砂丘（甘沼砂丘）上に立地する。

本遺跡は、古墳時代後期から奈良・平安時代、中世、近世の集落址と遺物散布地が確認された複合遺跡として周知されており、本遺跡が所在する第3砂丘上には、東側に向原遺跡（No. 193）、西側には南遺跡（No. 52）、間門遺跡（No. 9）、間門B遺跡（No. 208）の包蔵地が展開し、本遺跡と同時期の遺構・遺物が確認されている。本調査地点は遺跡包蔵地の中央東側に位置し、第1次調査に該当する。

香川原遺跡では、これまで下水道布設工事に伴う発掘調査などが実施されており（茅ヶ崎市教育委員会 2017）、古墳時代～近世に至る遺構・遺物が確認されている。遺構としては竪穴住居址・溝状遺構・土坑などが確認されているがいずれも狭小な調査範囲であった。広範囲での発掘調査は今回が初である。

本地点は原遺跡範囲の中央東側に位置する。1882（明治 15）年に日本陸軍測量部が作成した「迅速測図」によると、本地点西側の南北方向の道路は近代初頭の段階で生活道であったことが確認でき、本地点は畑として利用されていたと推測される。今回の調査に先立って実施した試掘調査では北東から南西方向に延びる溝状遺構3条を確



第1図 調査地点位置図（1/10,000）

認した。3条のうち溝状遺構1（1号溝状遺構）の底面から一次堆積とみられる宝永パミスを多量含む黒色砂質土層が断面観察により確認された。

9 調査の経緯と経過

本調査地点は、宅地造成工事に伴う記録保存を目的とした発掘調査である。茅ヶ崎市教育委員会が実施した試掘調査で遺構・遺物が確認されていることを受け、事業者と茅ヶ崎市教育委員会で協議を重ね、開発道路部分を対象として調査を実施することとなった。このうち調査区西端は既存道路と接することから、安全面を考慮し、道路から 0.5m 離れた場所から調査区を設定したため実施面積は 101.77 m²となった。現地表面の標高は約 8.1 ～ 8.5m であり、ほぼ平坦である。

10 調査の概要

本調査地点では、近世以前の遺構と弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近世の遺物が確認された。

検出した遺構は、18 世紀初頭以前の溝状遺構 4 条・土坑 1 基・ピット 1 基・耕作痕 3 基、18 世紀前葉頃までの溝状遺構 4 条・土坑 2 基・ピット 2 基の計 17 基の遺構を確認した。

出土した遺物は、計 15 点と僅少であったが、幅広い時代の遺物が出土している。内訳は、古代以前の遺物として、弥生時代の石器 2 点（431.5g）、古墳時代の土師器 2 点（6.0g）、奈良・

平安時代の土師器 4 点 (12.0g) である。中世・近世の遺物では、中世陶器 1 点 (43.5g)、近世陶器 1 点 (5.1g)、磁器 1 点 (6.4g)、石製品 4 点 (111.2g) である。出土した遺物のうち、遺構の廃絶年代を示唆する遺物に乏しかったため、基本層および遺構埋土に含まれた宝永パミスを勘案した遺構の把握にとどまった。

本調査地点の様相について、各面毎にその調査成果を述べたい。

(1) 3 面

3 面では、本調査地点の地山層とみられる 12 層を掘り込む 3 号土坑、その上層である 11 層を掘り込む P3 を確認した。

遺構密度は低く、遺物の出土もないことから、集落の範囲外であったと考えられる。

(2) 2 面

2 面では、黒色砂質土を主体とする基本層 9 層から掘り込まれた溝状遺構 4 条、耕作痕 3 基を確認した。遺物は基本層 8 層から土師器が 3 点出土している。耕作痕は溝状遺構を切るように構築されていることから、溝状遺構が廃絶してから耕作域へと変化したと考えられる。また、東西に走る耕作痕と南北に走る耕作痕が重複することから、少なくとも耕作域としての利用が二時期に分かれていたと考えられる。溝状遺構の性格が不明のため、溝状遺構が機能していた時期に居住域であったかは不明だが、耕作域として利用され始めた頃には集落の範囲内であったことが推測される。

(3) 1 面

1 面では、黒褐色砂質土を主体とする基本層 4・5 層から掘り込まれた溝状遺構 4 条・土坑 2 基・ピット 2 基を確認した。4 層は調査区南側のみ、5 層は調査区北側のみで見られた。1～3 号溝状遺構は 2 面の耕作痕の東端を切る形で構築されていた。新旧関係で最も新しい 1 号溝状遺構の廃絶年代は 18 世紀前葉頃と推定された。1 号溝状遺構に掘り込まれた 4・5 層直上には現代の盛土層が堆積していることから、18 世紀中葉以降の様相は不明である。ちなみに、1882 (明治 15) 年に日本陸軍測量部が作成した「迅速測図」にみる本調査地点は畑と松林の境となっていることが看取された (第 5 図)。このことから、1～3 号溝

状遺構は近世期において構築後、二度に渡って造り替えが行われた耕作域と林の区画溝と考えられる。1 面では耕作痕は確認されていないが、これは溝状遺構の内側に畝を設けたことで耕作域がより西側に位置したためと考えられる。

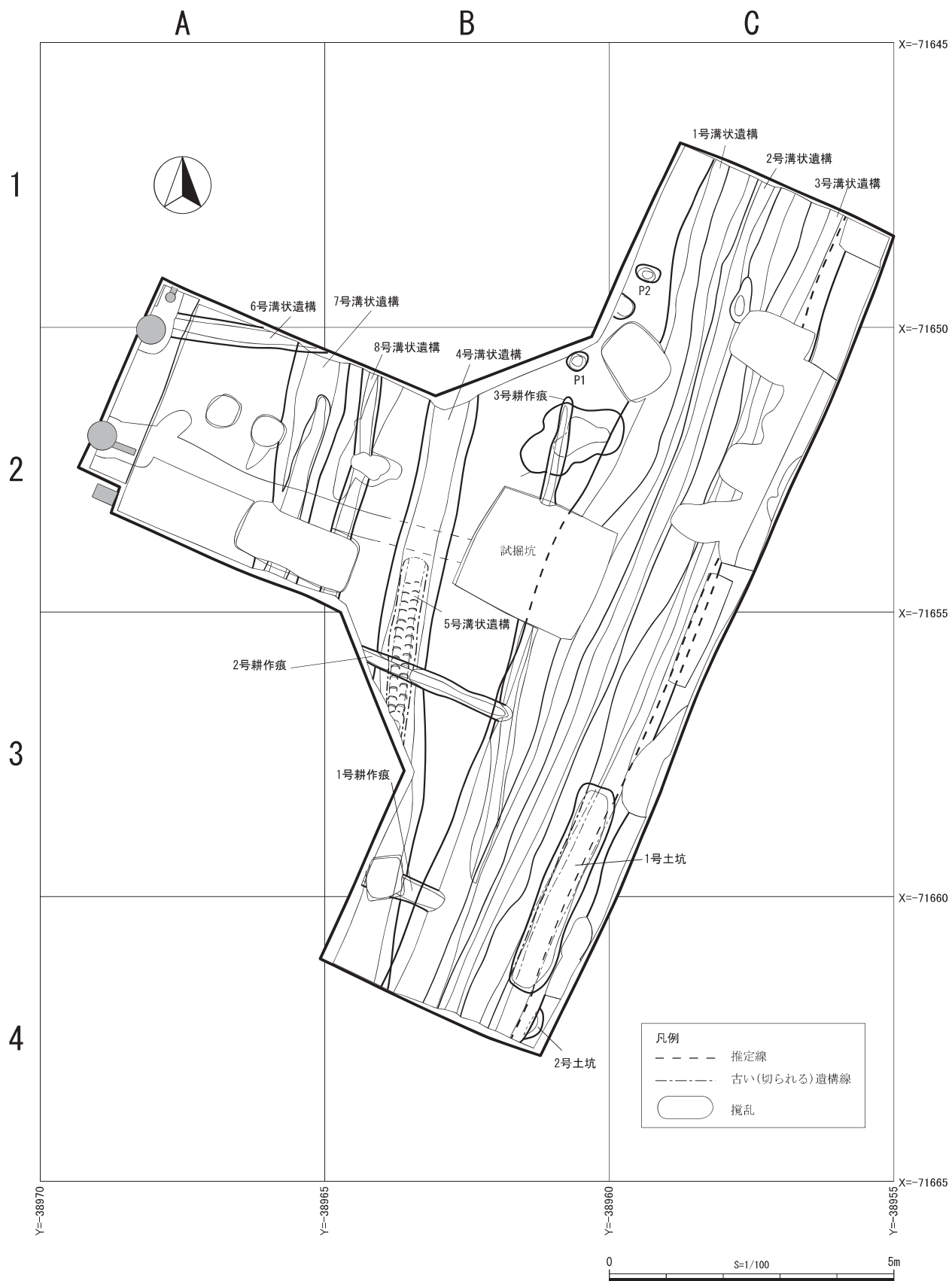
11 まとめ

各面での遺構検出状況から、今回の調査地点は集落の中心地からやや外れており、主に耕作域として利用されていた空間であったと考えられる。このことは、第 5 図の迅速測図においても、推定される調査地点周辺に耕作を主とする土地利用が示されていることから裏付けられる。1・2 号溝状遺構から合わせて 4 点の砥石が出土したが、こうした資料も農耕などに関わる活動痕跡の一端を示すものと考えられる。基本層序に関しては、既往調査例がないことから詳細な時期は確定できなかった。しかし、黒色砂質土を主体とし、橙色スコリアを含む基本層 8～10 層は本調査地点周辺の奈良・平安時代の遺物包含層に近似しており、基本層 8 層から土師器が 3 点出土している。本調査地点の位置する第 3 砂丘上には奈良・平安時代や中世の集落が多数存在していることから、2～3 面の遺構の時期は古墳時代後期～奈良時代を上限とし、1 面の遺構は 1 号溝状遺構埋土で認められた宝永パミスや基本層序の検出状況から、18 世紀初頭以前を下限とするものと考えられる。4 号溝状遺構出土の磨製石斧や、1 号溝状遺構出土の常滑産大甕片などは、製作時期において近隣の遺跡群との関係を示す傍証とも考えられる。いずれにせよ、基本層序及び 2 面遺構の検出状況から耕作域としての利用は近世以前から行なわれていたと推定される。今後、周辺に同様の遺構が確認されることで耕作域としての利用の開始時期や範囲が明確になると考えられる。

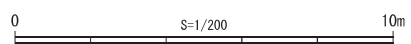
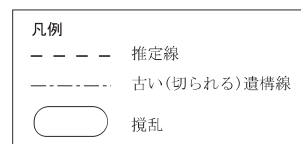
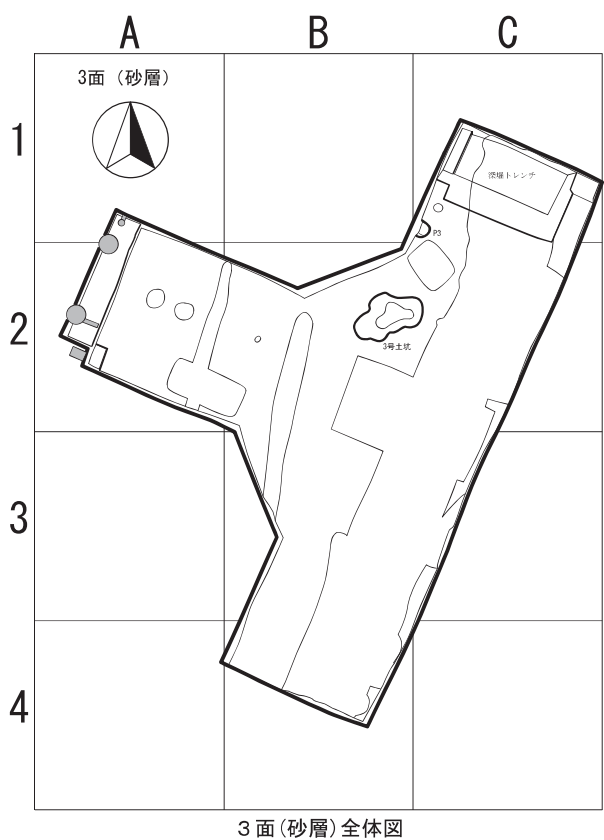
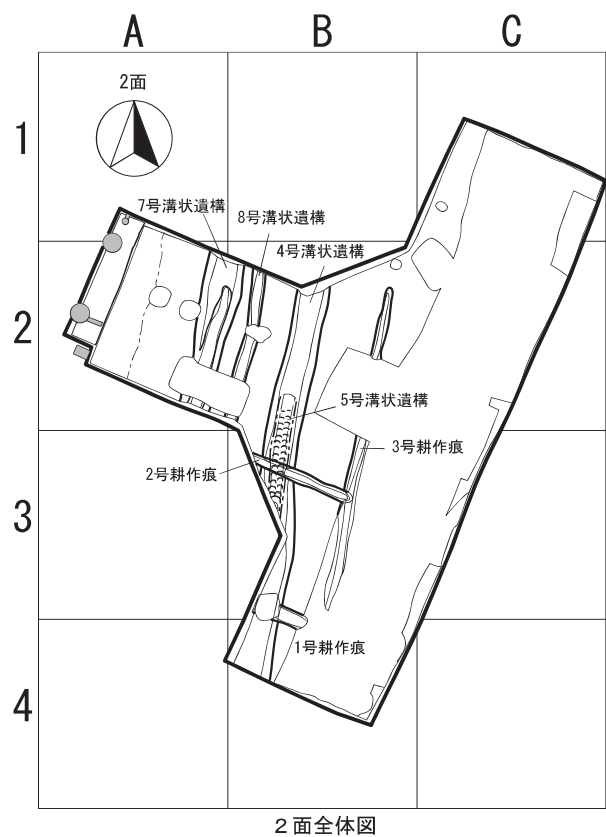
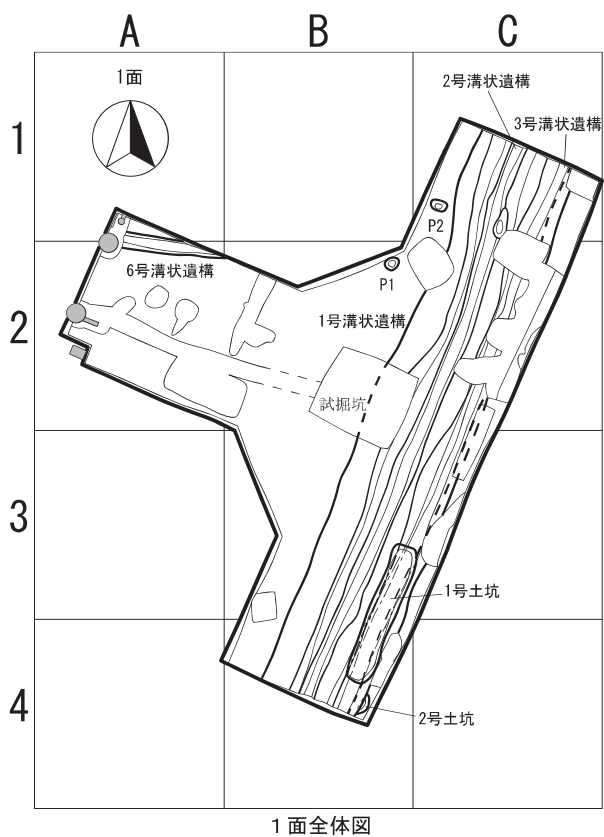
文末にあたり、御協力、御尽力いただいた関係機関・諸氏に、記して感謝を申し上げる。

参考文献

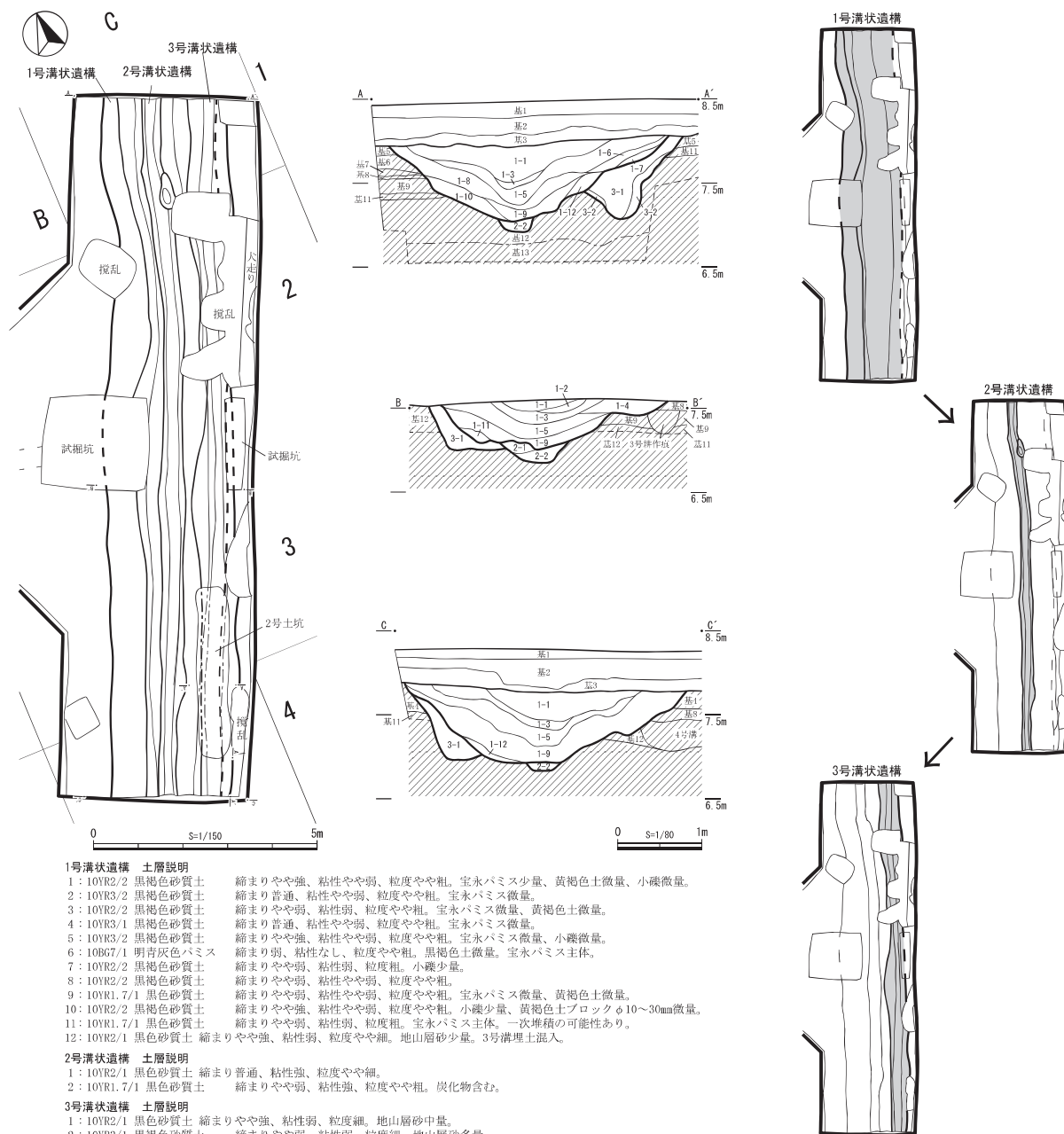
- 茅ヶ崎市教育委員会 2017『市内遺跡試掘・確認調査報告 X V - 平成 27(2015) 年度実施の埋蔵文化財試掘・確認調査報告 -』
- 株式会社四門 2020『神奈川県茅ヶ崎市香川 原遺跡』第 1 次調査報告



第2図 遺構全体図 (1/100)



第3図 各時期別全体図 (1/200)



第4図 1～3号溝状遺構平・断面図および変遷図



第5図 「迅速測図」 推定調査地点・地理院地図 調査地点図



1. 1面全景(北から)



2. 2面全景(北から)



3. 1～3号溝状遺構完掘(南から)



4. 基本層序I(南から)



5. 出土石製品



6. 出土土師器



7. 出土陶磁器

10 ^{しもてらお にしかた} 下寺尾 西方遺跡第 11 次確認調査

三戸 智也

- 1 調査地点 下寺尾 515
- 2 調査期間 令和2年 11 月 19 日
- 3 調査主体 茅ヶ崎市教育委員会
- 4 調査担当者 三戸智也・加藤大二郎（社会教育課）
- 5 調査目的 防災無線更新工事に伴う史跡確認調査
- 6 調査面積 3.24㎡
- 7 遺跡の時期 縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

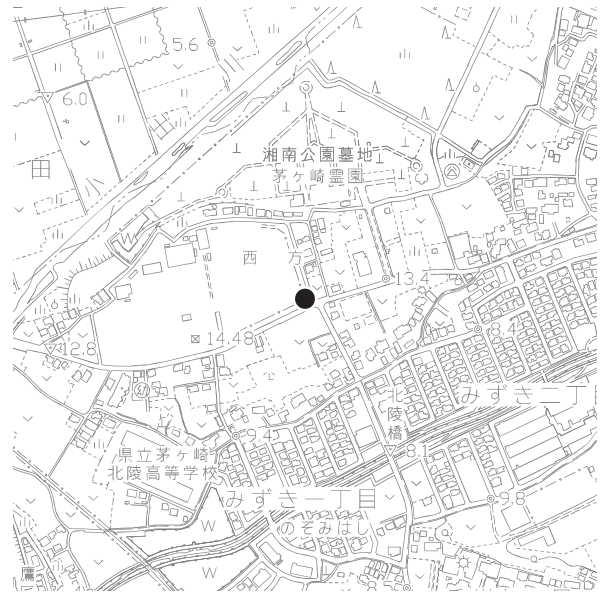
本遺跡は、下寺尾 547、1162 ほかに所在する。神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳によると、東西 650 m、南北 300 m の中央が膨らむ細長い範囲である。現地表面の標高は、約 8.2 ～ 14.4 m で、遺跡の北・南・西側は下降傾斜する。南側 5.0km で相模湾、西側 2.5km で相模川の距離となり、遺跡北西側には小出川が近接する。

西方遺跡は、相模野台地が西に向かって延びる舌状台地に立地する遺跡で、南側が砂丘上の七堂伽藍跡に接する。「史跡下寺尾官衙遺跡群」および「史跡西方遺跡」を構成する遺跡であり、本市の歴史を知る上で特に重要な遺跡といえる。

9 調査の経緯と経過

市防災対策課から既設防災無線のマストを更新する工事の計画について照会を受けた社会教育課は、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地の西方遺跡（No.1）の包蔵地内であるとともに「史跡下寺尾官衙遺跡群」および「史跡西方遺跡」の範囲内であったことから、史跡への工事影響を確認するための試掘・確認調査が必要である旨を回答した。

これを受けて市防災対策課から「埋蔵文化財確認調査指導依頼書」が提出されたことから、令和2年 11 月 19 日に確認調査を実施した。調査区は既設防災無線のマストを中心に工事の影響を受ける可能性がある 1.8 m 四方を設定し、アスファルトを除去した後に、人力にて掘削を行った。



第1図 調査地点位置図（1/10,000）

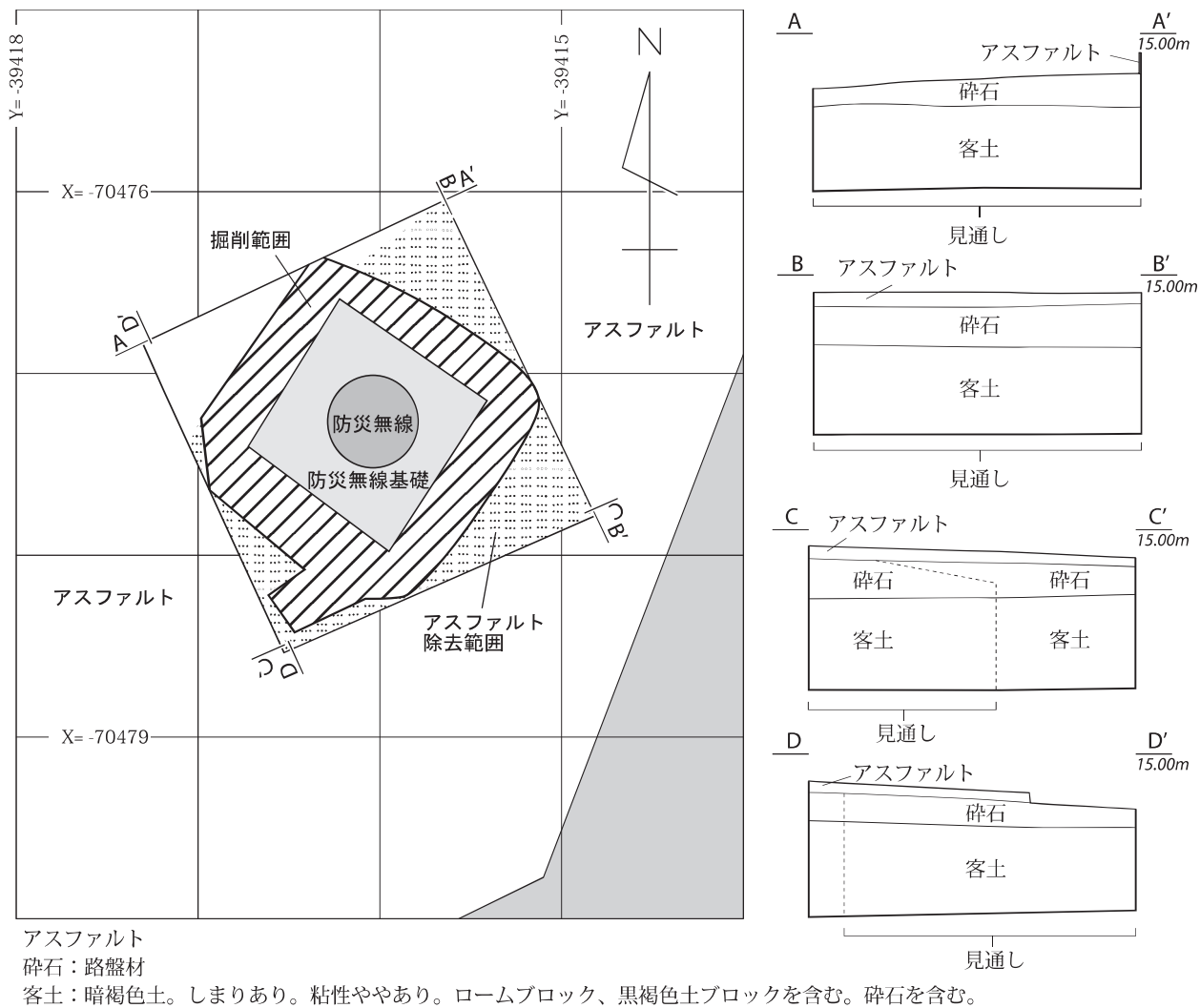
10 調査の概要

調査の結果、地表下 20 ～ 30cm（標高 14.6 m）までアスファルトおよび路盤材の碎石で、その下は客土であった。客土を除去した地表下 55 ～ 60cm（標高 14.3 m）では、既存防災無線のマストを中心に約 100cm 四方のコンクリート基礎を検出した。その後、工事の掘削がおよぶコンクリート基礎の周囲 30cm、基礎の天端から下に 15cm を調査したが、確認した範囲と壁面はすべて客土であった。客土内から縄文土器が出土した。

11 まとめ

調査区範囲内は調査状況から既存防災無線の掘り山と考えられる。一方、客土内に遺物が混入しており、客土を構成する土壌が周辺の堆積土を基質としていることから、客土は防災無線設置時に掘削された本来の堆積土が攪拌されたものと考えられる。

本遺跡は「史跡下寺尾官衙遺跡群」および「史跡西方遺跡」を構成する遺跡であり、弥生時代中期後半の環濠集落、古代の高座郡家に比定される官衙遺跡などが発見されている。本調査では、それらの痕跡は確認できなかったが、史跡の中心地点であり、慎重な対応が求められる。



第2図 全体図 (1/40)



1. 調査地点近景 (西から)



2. 調査状況 (東から)

11 にしくぼ かみのまち 西久保 上ノ町遺跡第 21 次調査

降矢 順子

- 1 調査地点 西久保字上ノ町 1539 番 1
- 2 調査期間 令和 3 年 2 月 10 日～2 月 26 日
- 3 調査主体 株式会社齊藤建設
- 4 調査担当者 降矢順子
- 5 調査目的 集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 6 調査面積 21.37㎡
- 7 遺跡の時期 古墳、奈良、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

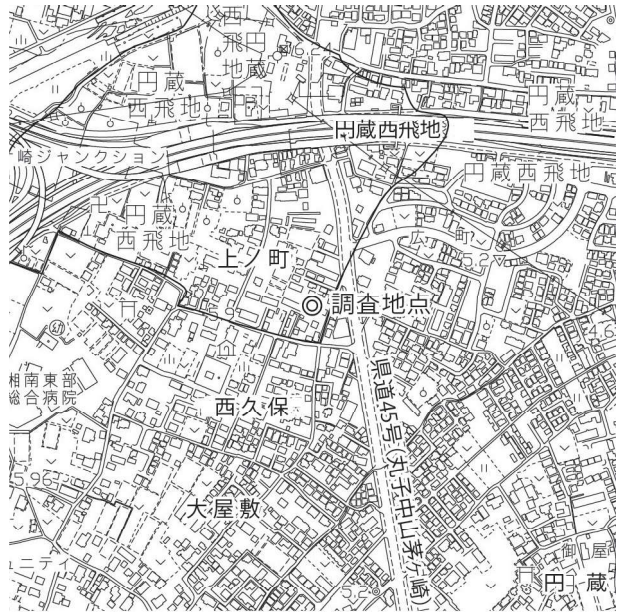
上ノ町遺跡は、茅ヶ崎市の海岸線から 4km 北、相模川の東 2km ほどに位置している。茅ヶ崎市南西部に広がる西久保地区は円蔵、浜之郷、矢畑地区とともに自然堤防に囲まれた沖積微高地の北端部に立地している。

本調査地点は、上ノ町遺跡範囲の南東部に位置し、上ノ町遺跡第 11 次調査地点の北側の敷地内にある。

9 調査の経緯と経過

茅ヶ崎市西久保字上ノ町 1539 番 1 地点における土木工事等について事業者から埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた茅ヶ崎市教育委員会は、当該地が上ノ町遺跡の包蔵地内であることから、2020 年 12 月 16 日に試掘・確認調査を実施した。その結果、古墳時代～中世の遺物、遺構を確認したことから、事業地のうち遺跡に影響を与える雨水浸透パネル設置場所及び進入道路の一部について発掘調査を実施することとなった。調査面積は、事業面積 496.03㎡に対し 21.37㎡で、残りの部分については原則現状保存とした。

調査にあたっては、まず雨水浸透パネル設置場所の調査を先行し、その後、道路部分の調査を行った。本地点で確認した基本堆積層は 5 層である。Ⅰ層は表土層・バラス層で地表面は海拔 5.75m 前後、Ⅱ層は軽石を多く含む茶褐色砂質土で近世以降の耕作土と考えている。海拔 5.30m ～ 5.60m の間に堆積している。Ⅲ層は橙色スコリアを多く含む固く締まった暗茶褐色土で上面レベ



第 1 図 調査地点位置図 (1/10,000)

ル 5.45m を測る。Ⅳ層は橙色スコリアを含まない暗茶褐色土で上面レベル 5.30m を測る。Ⅴ層は黄茶褐色粘土層（ローム層）で海拔 5.0m 前後を測る。Ⅰ層とⅡ層の間に、Ⅱ層と同質の土が暗青灰色に変化した部分が確認されたが、均一な堆積ではない。雨水等が溜まった状況があって、Ⅱ層が変色したと考えている。

10 調査の概要

調査では、Ⅲ層上面とⅣ層上面で多くの土坑、ピット等を検出した。調査ではⅢ層上面を 1 面、Ⅳ層上面を 2 面とした。

1 面では、Ⅱ層（近世耕作土）が埋まった浅くて細長い溝状の落ち込みを数多く検出した。また、円形土坑（土坑 1）や不整形な土坑も検出している。浅くて細長い落ち込みは、検出状況の良好な場所では、直線的に並んでおり、耕作痕と考えられる。Ⅱ層を掘り下げ中に近世の染付茶碗片や陶器片が出土している。

土坑 1 は調査区中央辺りの南壁際で検出され、一部が調査区外に延びている。確認規模は東西 145cm、南北 110cm、深さ 10 ～ 15cm を測り、軽石を多く含んだ茶褐色砂質土で埋まっている。底面は平坦ではなく、土坑周囲がより深く窪んで

いる。性格は不明。本土坑の北西のⅢ層上面で銅製品（金銅製か）の耳環が1点出土している。

2面では、試掘坑2で確認された土坑4基、竪穴状遺構1基、ピット9基ほかを検出した。土坑やピットは、調査区全域で検出したが、調査区内の東から南にかけて集中する傾向が確認できる。土坑は、橙色スコリアを多く含んだ固く締まった暗褐色～黒褐色粘質土で埋まり、底部近くには茶褐色土が堆積していた。ピットも土坑と似た土層で埋まっている。土坑やピットを調査中に、奈良時代から平安時代にかけての灰釉陶器片、須恵器片、土師器片等が出土している。

11 まとめ

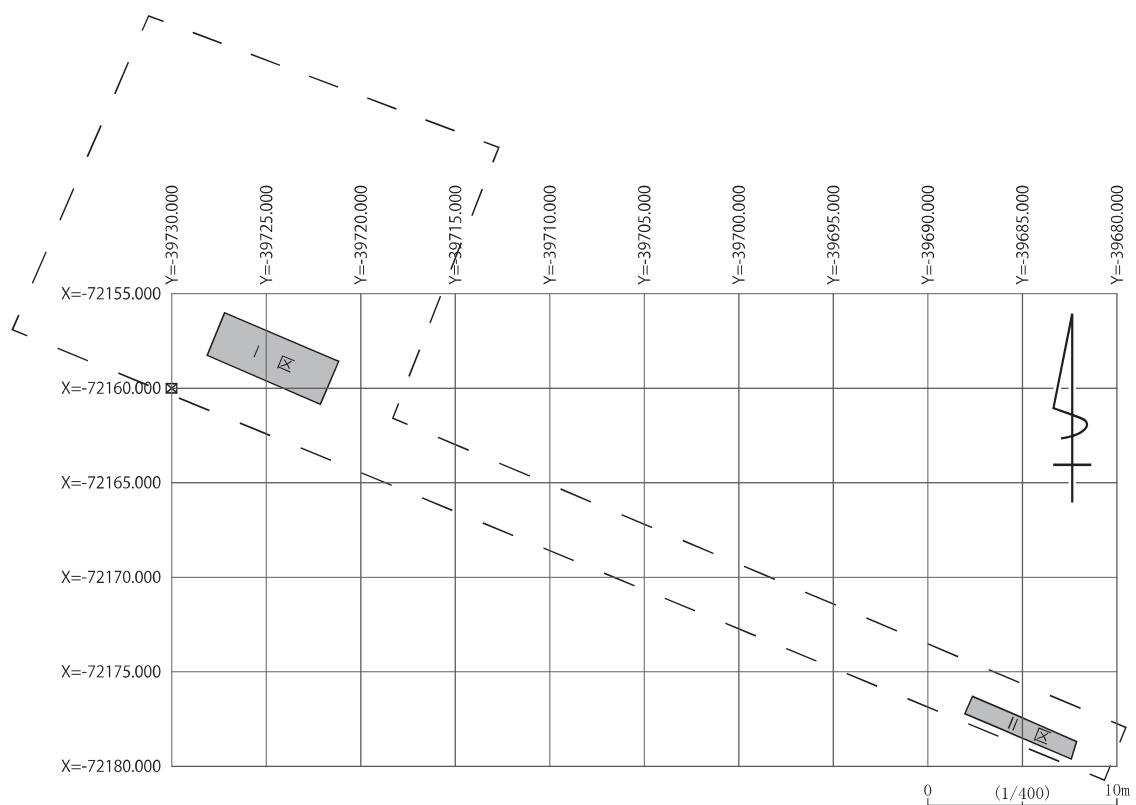
本地点周辺は、奈良時代～平安時代頃に生活が始まり、土坑やピットが数多く検出された。出土遺物には耳環もあり、比較的豊かな生活が営まれていたと考えられる。出土遺物の整理が進むと、

生活がはじまった年代が少し古くなる可能性もあると考えている。

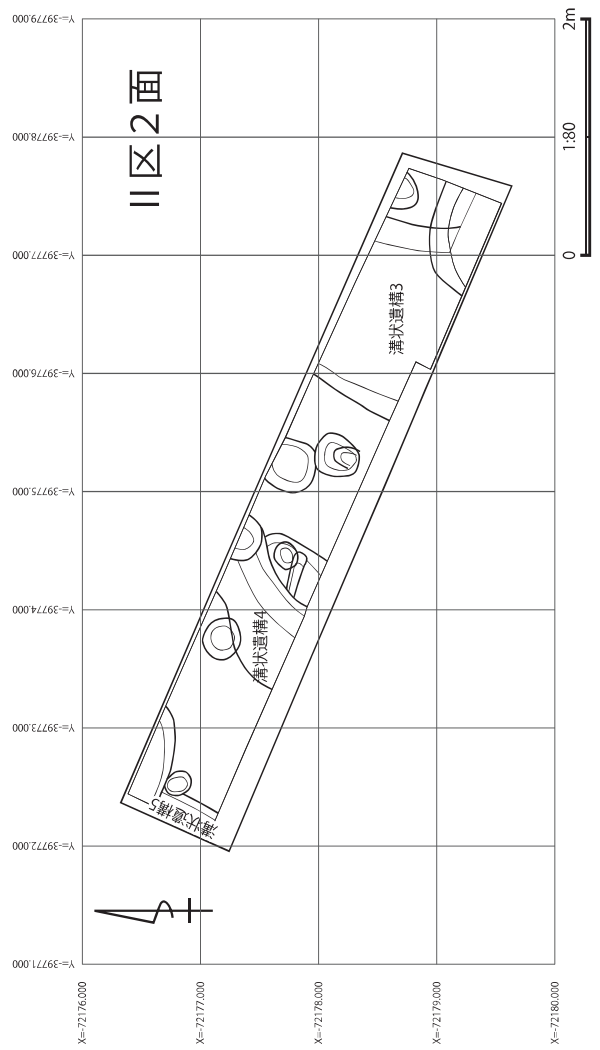
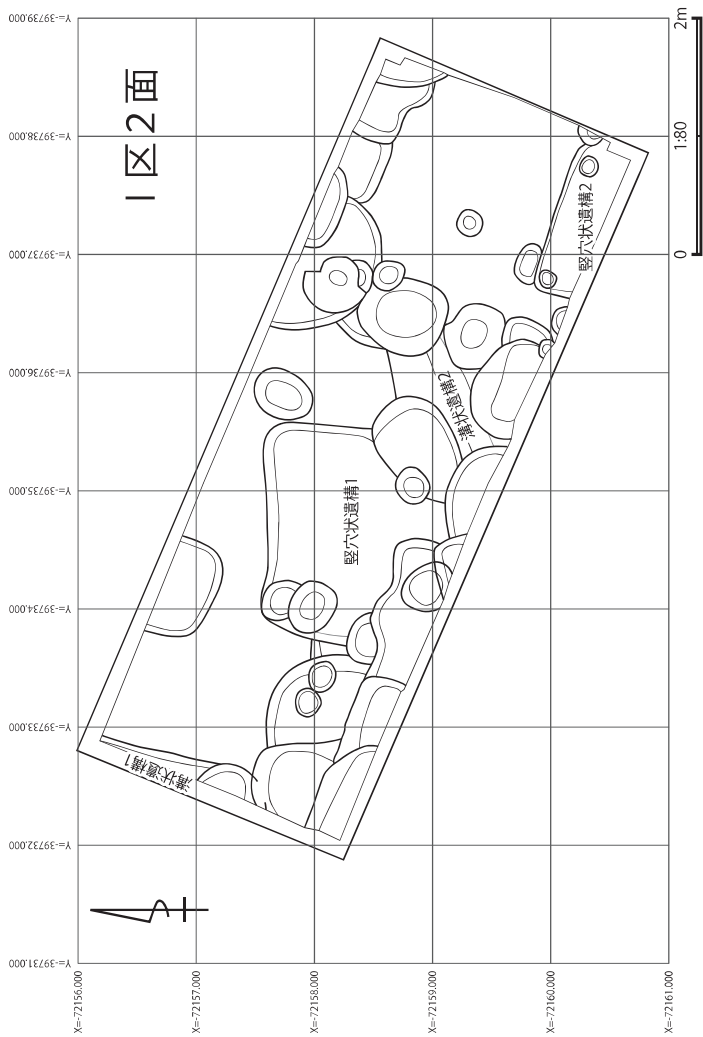
調査では、鎌倉時代の遺物は出土していないので生活痕跡は明らかにできなかったが、調査開始前に地表面から、かわらけ片と思われる土器片が採集されている。

Ⅱ層は出土している染付茶碗片や陶器片等から江戸時代の耕作土の可能性が高い。調査区の壁面で堆積土をみると、現地表下30cm、海拔5.45mの深さまで耕作土が達している。

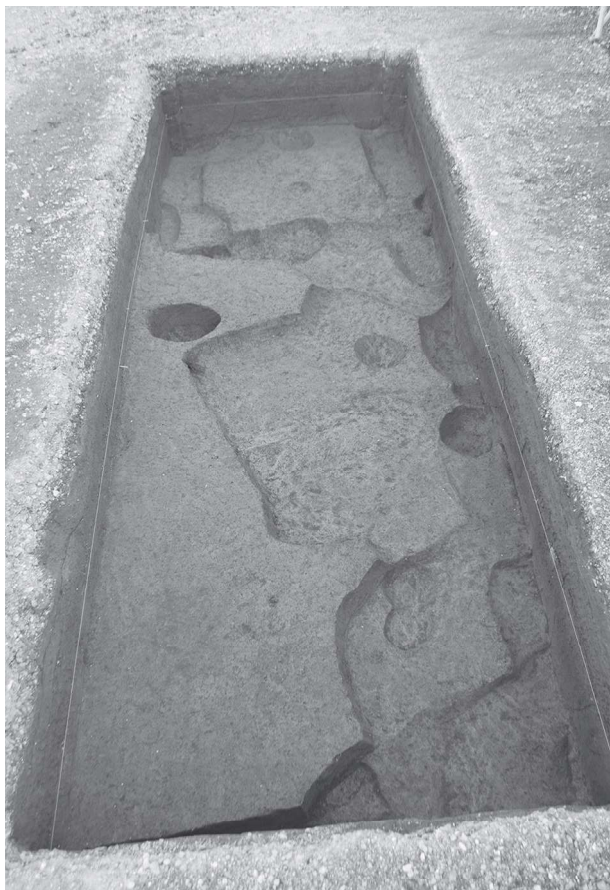
以上の事から、本地点では奈良時代～平安時代頃に開発が始まり、土坑やピット等が多くつくられ良好な生活痕跡が残されている。その後、近世の耕地開発で奈良・平安時代の遺構上部まで壊されて、この際に鎌倉時代の生活痕跡が削り取られてしまった可能性が高い。



第2図 調査区位置図 (1/400)



第3図 遺構配置図 (1/80)



1 I区2面完掘状況（西から）



2 II区2面完掘状況（東から）



3 I区2面検出遺構（北から）



4 I区2面 竪穴状遺構2（北から）



5 II区2面 溝状遺構3（南から）



6 出土遺物